

中池見湿地のラムサール条約登録と 新幹線問題

ラムネットJ事務局長 浅野正富

2012年7月、福井県敦賀市の中池見湿地は、日本政府が新たに登録した9か所のうちのひとつとしてラムサール条約湿地に登録されました。中池見湿地は、国際的にも極めて重要な泥炭湿地であり、世界屈指の層厚40mの泥炭層は約12万年分の堆積といわれ、典型的な袋状埋積谷で地形の破壊も少なく、一般的に泥炭地の生物相は貧弱といわれるなか生物の多様性も際立っています。特に植物相においては、「絶滅危惧種の博物館」と称され、環境省及び福井県のレッドデータ種は40種近く生



秋の気配が濃くなった2012年11月の中池見湿地

育し、昆虫相も豊かで、トンボにおいては70種が確認されています。鳥類も150種を超え、猛禽類(ワシ・タカ類)12種、環境省レッドリスト種14種、福井県レッドリスト種30種が含まれ、特にノジコが大量に飛来してくる地として著名です。動物相もツキノワグマ、ニホンカモシカなど哺乳類のほとんどの種が湿地を取り囲む里山に棲息が確認されるなど、健全な生態ピラミッドが形成されています。このように国際的に重要な湿地である中池見については、以前から湿地関係者の間で1日も早い条約湿地登録が期待されていました。

中池見湿地が条約湿地に登録された喜びもつかの間、2012年8月末に、2005年に認可されていた北陸新幹線のルートが中池見湿地の「後谷」部分を貫通する予定であることが明らかになりました。「樫曲」の集落方面から「余座」の集落方面に向かう新幹線ルートは、北陸自動車道のバイパスの下を通って、中池見湿地にかかるところからボックス工法と呼ばれるトンネルになり、中池見湿地の南側玄関口の「後谷」を地上高の高さで通り抜け、そのままトンネルとして「深山」を貫通し、余座側の地上40mの位置が出口になる予定であることが判明しました。事業認可前に行われていた環境ア

セスの際に予定ルートが中池見湿地の周囲の山の部分にかかるとは明らかになっていきましたが、湿地部分の「後谷」にはかかっていませんでしたので、アセス時からルートが変更されたことよって中池見湿地の水系や地下水脈、生物相に深刻な影響が懸念されます。中池見湿地の保全に長年関わってきた公益財団法人日本自然保護協会(以下自然保護協会と表記します)が事業主体の独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構(以下運輸機構と表記します)に確認したところ、運輸機構の見解は「ルートを変更する予定はない。今後工法を決定するために水文・自然環境の調査を行い、その結果によってできる限り中池見湿地の保全を図る工法を採用する」とのことです。

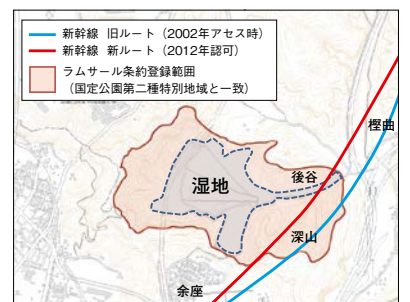
自然保護協会は昨年11月に環境大臣、国土交通大臣宛てに新幹線のルート変更を求める要望を行いました。しかし、地元福井県も敦賀市も長年北陸新幹線の誘致の立場を取ってきたおり、地元自治体が今から新幹線のルート的大幅な変更を求める声を上げることは、極めて難しいのが現実です。したがって、地元自治体は、仮に軽微な変更にとどまるにしても、新幹線建設に決定的な影響を与えな

い範囲で条約湿地に登録された中池見湿地をできる限り保全していかなければならないという困難な課題に直面しています。

ラムサール条約の理念である「湿地の賢明な利用」とは、すべての利害関係者が当該湿地の利用につき、情報を共有し意見を交換して最善な結論を導き出すことによつてしか成り立たないものです。条約湿地に登録されて間もない中池見湿地の自治体をはじめとする利害関係者が、北陸新幹線問題をめぐってどのような「中池見湿地の賢明な利用」を実現していくのか、私たちは、これからの推移を注意深く見守っていかねばなりません。そして、日本全国から、「中池見湿地の賢明な利用」が実現できるように、中池見湿地の保全に取り組む地元NGOのウエックランド中池見や中池見ねつとの皆さんに、できる限りの支援をしていきたいと思います。ラムネットJとしても、今後は、中池見湿地の新幹線問題に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

セスの際に予定ルートが中池見湿地の周囲の山の部分にかかるとは明らかになっていきましたが、湿地部分の「後谷」にはかかっていませんでしたので、アセス時からルートが変更されたことよって中池見湿地の水系や地下水脈、生物相に深刻な影響が懸念されます。中池見湿地の保全に長年関わってきた公益財団法人日本自然保護協会(以下自然保護協会と表記します)が事業主体の独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構(以下運輸機構と表記します)に確認したところ、運輸機構の見解は「ルートを変更する予定はない。今後工法を決定するために水文・自然環境の調査を行い、その結果によってできる限り中池見湿地の保全を図る工法を採用する」とのことです。

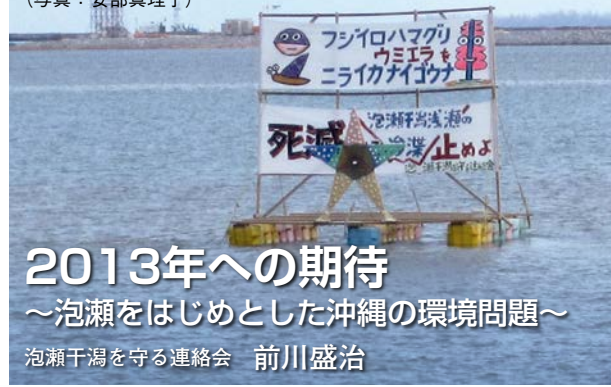
自然保護協会は昨年11月に環境大臣、国土交通大臣宛てに新幹線のルート変更を求める要望を行いました。しかし、地元福井県も敦賀市も長年北陸新幹線の誘致の立場を取ってきたおり、地元自治体が今から新幹線のルート的大幅な変更を求める声を上げることは、極めて難しいのが現実です。したがって、地元自治体は、仮に軽微な変更にとどまるにしても、新幹線建設に決定的な影響を与えな



中池見湿地と北陸新幹線の計画ルート (日本自然保護協会の資料を元に作成)



後谷から北陸自動車道バイパス方面。この間を新幹線が貫通する予定



2013年への期待

～泡瀬をはじめとした沖縄の環境問題～

泡瀬干潟を守る連絡会 前川盛治

2012年は、絶滅危惧Ⅱ類フジイロハマグリや神秘的なウミエラの生息地が破壊される浚渫工事の強行、6月の県議会選挙では野党が前進したものの泡瀬埋め立ての県予算を削除できなかった等、厳しい年でした。せめてもの救いは、予定されていた新港地区東埠頭の浚渫、その土砂を泡瀬埋め立て地に空気圧送船で投げ捨てる事業がまだ行われていないことです。



2012年度の泡瀬仮航路建設のための浚渫で破壊されたウミエラ (写真：小橋川共男)



2005年の発見に次いで2012年に再発見されたフジイロハマグリ (写真：屋良朝敏)

2013年は、自民党・公明党の連立政権の誕生、「強靱な国家づくり」「公共事業のバラマキ」で消費税増税分が公共工事に使われ、国中で環境破壊が進むなど厳しい年になりそうです。進行中の第二次泡瀬訴訟で勝利できれば、泡瀬埋め立て中止の展望が開け、光も見えてきます。裁判勝利を大きな目標にして、共に奮闘しましょう。

2002年、埋め立て工事が着工されてからこれまでの10年間で発見された新種は、オキナワキチヌ(魚類)、アワセヒガタツバサゴカイ(ゴカイ)、ザンノナミダ(貝)、ヒメメナガオサガニ(カニ)、リュウキウウズタ(海藻)、ニライイカナイゴウナ(貝)、カラクサモク(海藻)、ホソウミヒルモ(海藻)、



市が荒尾海岸に設置した渡り鳥の看板 (2008年当時)

ミル属の一種(海藻)、アワセカニダマシマメアゲマキ(貝)、ウンタクシジミ(貝)と、何と12種になります。アメリカなどでは、新種が一つ発見されただけで工事はストップです。日本は「環境後進国」であり、恥ずべき「経済先進国」です。

さて、沖縄では泡瀬埋め立て以外にも自然を破壊する工事(辺野古米軍新基地建設、高江米軍ヘリパット建設、浦添西海岸での米軍港建設、那覇大嶺海岸での那覇空港新滑走路建設等)が進行中です。環境省が奄美・琉球諸島を世界自然遺産に登録しようとしているのに、それに相反する計画が目白押しです。土建業者の仕事をつくるため、米軍のためなら自然破壊を平気で行うというこの日本(沖縄)の現実を変革していくことが大きな課題です。2月23日に東京で開催する「沖縄大問題シンポジウム」を成功させましょう(シンポの詳細は4ページ参照)。

泡瀬干潟を守る連絡会では、新政権への新たな要請、そのための新たな署名行動も提起しています。全国の仲間のご支援・共同の闘いをお願いします。

また、環境省九州地方事務所や熊本県庁も別途訪問し、右記の情報に加え、市長をはじめ荒尾市が保全に前向きであることを伝えました。当時、県や環境省は荒尾海岸が県指定鳥獣保護区であることやその現状について、十分な情報を持っておらず、今回、環境省がラムサールに向けて動き出すきっかけになったのではないかと考えています。

荒尾海岸が有明海の中では初めてラムサール条約登録湿地となりました。WWFジャパンも日本野鳥の会熊本県支部と調整の上、2008年よりたびたび荒尾市を訪問し、市関係者(市長、副市長、担当課、地域振興会)と、水鳥の日本有数の渡来地であること、観光資源としてのポテンシャルもあること、漁業などの利用を制限するものではないこと等、随時情報交換に努めました。コープ九州の機関誌に市長のコメント付きで荒尾海岸の紹介記事を掲載したり、全国の重要渡来地をポスター形式で分かりやすく紹介した資料の中でも荒尾市の活動を紹介し、地域イベントで活用してもらうなど、市民に広く知ってもらおうと努めました。

荒尾海岸は大きな環境保全上の障壁がなかったこともあり、特段の対立もなく進みましたが、それでも4年ほどかかりました。有明海で登録地が誕生したことは、生物多様性保全そして環境保全活動を考える上、重要な意味を持ちます。現行の国内干潟登録地のほとんどが、漁業活動が行われていない都市型もしくは自然公園型です。漁業という基幹産業の場と重複する荒尾海岸は、ワイズユースのひとつのあり方を示す場になるのではないかと期待しています。

郎氏が中心となり、以前より市役所(時には市長)を訪問し、情報を伝え、良好な関係づくりに努めてきたことがあります。地域振興会とともに観察会を実施したり、市に要請して渡り鳥の看板を設置してもらったりといった実績がありました。

荒尾海岸は大きな環境保全上の障壁がなかったこともあり、特段の対立もなく進みましたが、それでも4年ほどかかりました。有明海で登録地が誕生したことは、生物多様性保全そして環境保全活動を考える上、重要な意味を持ちます。現行の国内干潟登録地のほとんどが、漁業活動が行われていない都市型もしくは自然公園型です。漁業という基幹産業の場と重複する荒尾海岸は、ワイズユースのひとつのあり方を示す場になるのではないかと期待しています。

荒尾海岸がラムサール条約に登録されるまで

WWFジャパン 前川 聡



市が荒尾海岸に設置した渡り鳥の看板 (2008年当時)

表浜海岸は遠州灘、渥美半島の太平洋岸に面した約57kmの広域に広がる砂浜海岸の通称です。この海岸の特徴は広域で開放的な砂浜であること。まず、初めて訪れた方は間違いなく「こんな海岸が日本にあったなんて」と言われます。しかし、一見、単調な砂浜の景観からか、自然環境面からは残念ながらあまり評価されていないようです。

表浜の景観を見ると広い砂浜の後方には砂丘が形成され、さらにその背後には海食崖と丘陵が連なっており、丘陵には豊かな照葉樹林帯が水源涵養林として機能しています。照葉樹林の丘陵は砂岩、粘版岩であり、湧水を脈々と砂丘から砂浜へと海側に供給しています。半島がまるで太平洋に突き出たパイプのような役目を果たし、砂浜というフィルターを通じて海洋に栄養塩を供給しているのです。その砂浜には細かな砂地を良く見ると無数の穴を容易に目にする事ができます。これらはハマト

ビムシなど砂浜の間隙生物がたつぷりと存在しているのです。目では捉えらるる事が困難ですが、地下を脈々と流れる地下水系が存在することで、沿岸から沿岸砂州で形成される浅海までの異なる環境の繋がりが保たれています。この繋がりに小動物なども海岸と崖森を行き来しているのです。このような距離的に短い水系でも広域に連続することによって、多大なる物質交換や循環を沿岸で行っていると考えられます。多様で異なる環境が一つのパッケージとして連続することで、豊かな沿岸生態系の象徴でもあるアカウミガメの産卵場として成立しているのでしょう。

同様に沿岸砂州が連続し形成される浅海はこの海域の特産物でもあるシラスやコウナゴなど水産業を育む豊かな漁場となっています。そこで留意すべきは陸から海へと推移する環境には変化が少ない単調な環境も存在しているということ。比較的単調な砂浜や砂底ではシンプルな生物相で成り立っていたとしても、多様性に代わって特異性を持っている生物が、隣接する異なる環境を繋ぐ重要な役目を担っている場合も認められます。このような違いを持ち、面的に繋がる海から陸までの繋がりを新たな視点で理解し、いかに保全を進めるかが、今後の沿岸・海洋域にとって重要な観点と考えます。



砂浜、砂丘、海食崖が延々と続く表浜海岸



名古屋 表浜海岸
ウミガメの産卵環境調査活動

同様に沿岸砂州が連続し形成される浅海はこの海域の特産物でもあるシラスやコウナゴなど水産業を育む豊かな漁場となっています。そこで留意すべきは陸から海へと推移する環境には変化が少ない単調な環境も存在しているということ。比較的単調な砂浜や砂底ではシンプルな生物相で成り立っていたとしても、多様性に代わって特異性を持っている生物が、隣接する異なる環境を繋ぐ重要な役目を担っている場合も認められます。このような違いを持ち、面的に繋がる海から陸までの繋がりを新たな視点で理解し、いかに保全を進めるかが、今後の沿岸・海洋域にとって重要な観点と考えます。

ミャンマーでの水鳥調査

ラムネットJ 富田 宏



写真1

2012年12月12日から16日まで、ミャンマーのマルタバン湾に飛来する水鳥の調査に行ってきました。当地での調査は2010年からラムネットJの柏木実さんを中心として進められています。これまでの調査から、マルタバン湾(写真1)がヘラシギの最大の越冬地であることが明らかにされ、地域の人々によって漁網を使った鳥類の捕獲が行われており、それがヘラシギを絶滅の淵に追いやった可能性が高いことが示唆されています。

ヘラシギは今、アジアの水鳥の中で最も絶滅の可能性が高いと考えられており、世界でわずか300羽ほどしか生息していないと推定されています。絶滅の危機からヘラシギを救うために、ヘラシギの繁殖地(北極圏)・中継地(日本、韓国、中国など)・越冬地(ミャンマー、タイ、バングラディッシュ)を含む広域的な保全が必要です。

東京から南西方向に4700km離れたミャンマーは、日本の1.8倍くらい(67万6578km²)の面積があり、その国土は

標高5000mから平野部に広がるデルタ地帯、河口・沿岸の干潟まで、著しい標高差を含んでいます。南部のマルタバン湾はヘラシギをはじめとした水鳥の重要な生息地として注目されていますが、中部、北部の山間部の森林もまた野生生物の重要な生息地として知られており、2011年にはミャンマー北部のカチン州の山地で新種のシシバナザルの仲間が発見されています。

私たちがヘラシギをはじめとした水鳥を調査しているマルタバン湾には多くの水鳥が飛来します。これまでに私たちの調査ではヘラシギを含め26種の水鳥が記録されています。この地域が鳥たちにとって重要な生息地である理由の一つが、鳥たちのフライウェイが交差する場所だからではないかと考えています。マルタバン湾では、日本でも見られる水鳥(東アジアフライウェイを季節的に移動する鳥)が確認される一方で、インドトキコウ(Painted Stork)、ヒメツバメチドリ(Small Pratincole/写真2)といった主に中央アジアに分布する水鳥も確認されます。

2012年12月の調査では、マルタバン湾で越冬する水鳥の調査と、マルタバン湾周辺で

暮らす人達の生活状況についてヒアリング調査を行いました。

●マルタバン湾の水鳥調査

今回の調査では25羽のヘラシギを確認しました。このうち11羽はヘラシギだけの群れをつくって右へ左へくちばしを動かしながら餌をとっていました(写真3)。ひょっとしたらその中には2012年の夏に日本のどこかの湿地で羽を休めていたヘラシギがいたかもしれません。

●地域住民へのヒアリング調査

今回の調査では初めて地域住民へのヒアリング調査を実施しました。特に注目すべき問題として明らかになったのは土地の浸食です。土地の浸食は河川が運ぶ土砂、沿岸の漂砂、そして波浪や地球規模の海面上昇など、さまざまな要因が関わる問題です。今後この地域のラムサール条約登録に向けた活動や、地域の持続的な発展にむけた議論において、ヘラシギをはじめとした水鳥の調査に加え、沿岸の物理環境の調査、地域住民の生活に関する理解を深めていかなければなりません。



写真2



写真3

田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト キックオフ集会

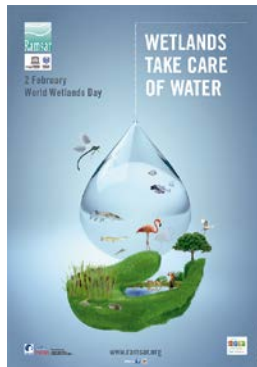
- 日 時：2013年2月9日(土) 13:00～18:00 (開場12:30)
- 会 場：小山市立生涯学習センター (栃木県/JR小山駅西口前)
- 主 催：ラムサール・ネットワーク日本
- 参加費：無料 (事前申込不要、当日受付)
- 問い合わせ：渡良瀬遊水池をラムサール条約登録地にする会事務局
TEL 0285-25-6577 (浅野正富法律事務所内)
- プログラム
 - 第1部 基調講演 田んぼの生物多様性と各地の取り組み
 - 第2部 田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト、その生い立ちと行動計画
 - 第3部 みんなで語る、未来の田んぼ宣言

田んぼをすみかとするさまざまな生きものが、農業、環境、そして心を支える底力となっていることに注目し、田んぼの生きものの多様な世界を取り戻すために「田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト」を開始します。このキックオフ集会では、各地で田んぼの生きものに関心や関わりを持つ方々を招き、交流を深めます。個人、団体、農業経験の有無を問いません。多数の参加をお待ちしています。

沖縄大問題シンポ STOP! 高江・辺野古・泡瀬・大嶺 ～米軍基地、公共事業から沖縄の自然と暮らしを守る～

- 日 時：2013年2月23日(土) 13:00～17:00 (開場12:30)
- 会 場：台東区民会館 特別会議室 (東京都台東区/浅草駅)
- 主 催：沖縄・生物多様性市民ネットワーク、沖縄環境ネットワーク、ラムサール・ネットワーク日本
- 参加費：資料代1000円 (事前申込不要、当日受付)
- 問い合わせ：TEL 090-2452-8555 (花輪伸一)

沖縄では米軍基地と公共事業により、自然環境と生活環境が破壊され続けています。東村高江では米軍ヘリパッド工事の強行、名護市では辺野古新基地建設計画、沖縄市では泡瀬干潟の埋め立て工事、那覇市では大嶺海岸を埋め立てる那覇空港拡張計画が進行しつつあります。今回のシンポでは、それぞれの地域の問題に関して、事業計画や環境アセスの問題点、住民の方々と支援者の活動などについて報告し、解決のために私たちができることを探ります。



●2月2日は世界湿地の日 ラムサール条約が採択された日である2月2日は「世界湿地の日」です。今年も「湿地と水管理/湿地は水を育む」となっています。条約事務局ではポスター(左写真)やリーフレットなどのツールを配布しています。

●湿地のグリーンウェイ2013 参加団体募集 ラムネットJでは今年も「湿地のグリーンウェイ」を開催します。このキャンペーンは、国際生物多様性の日(グリーンウェイの日)の5月22日を中心に、湿地が生きもので賑わう4月～6月の3か月間を湿地の生物多様性保全の普及・推進期間として、自然観察会、生きもの調査、田植え、シンポジウムなどの活動を、全国で連携して行い、湿地の生物多様性保全と賢明な利用を広く知らせようというCEPA活動です。たぐいま、キャンペーンに参加して湿地保全に関連したイベントを実施していただける団体を募集しています。参加費は無料。申し込み締切は2月末日です。詳しくはHP (<http://www.ramnet-j.org/gw/>)をご覧ください。

●徳島で報告会を開催しました ラムネットJでは、昨年10月20日に徳島市で、湿地のグリーンウェイ2012&ラムサールCOP11報告会「スポーツから流域へ」湿地が「つなぐ自然と人々」吉野川をラムサール登録地に!!」を開催しました。吉野川の環境保全に取り組んでいる団体が、グリーンウェイでのイベントや日頃の活動を発表したほか、新しく条約湿地に登録された兵庫豊岡市の円山川下流域でのコウノトリの野生復帰に関する報告などが行われました。



ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

●郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

●ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員はウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。<http://www.ramnet-j.org/join.html>にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、ペイパルを使ってオンラインで決済することも可能です(クレジットカードも使用できます)。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本
(一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキョウ) 店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員		賛助会員	
	総会での議決権があります		総会での議決権がありません	
一般	1口	5,000円	1口	2,000円
団体	1口	10,000円	1口	10,000円
特別	50,000円以上		30,000円以上	
企業	-		1口	100,000円

年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org